

●ヘルムート・ラッヘンマン (1935~)

『動き (硬直の前の)』

アンサンブルのための (1983/84)

死に瀕し、背中を下にしてひっくり返っているカブトムシ。その脚はもがくように宙を引っ掻くが、虚しくも力尽き、やがて静寂が訪れる……。

ヘルムート・ラッヘンマン (1935~) の『動き (硬直の前の)』は、1984年11月12日に、ペーテル・エトヴェシュ指揮アンサンブル・アンテルコンタンポランによって初演された作品。不思議なタイトルは、まさに生物が死に直面した際の「最後の震え」をあらわしており (その例として、彼はひっくり返ったカブトムシを挙げるのだ)、麻痺的な運動が全編にわたって展開する。

ラッヘンマンの創作の多くにおいては、楽音と噪音の狭間で音楽が構築されてゆくが、もちろんこの曲も例外ではない。曲は25分ほどの間を通して、さまざまな音響が組織され、それがはかなくも分解するという過程を繰り返しながら進んでゆく (実際、ほとんど旋律らしきものはあらわれないので、音を聴きながらスコアを追うだけでも至難の業だ)。

全体は大きく3つの部分として捉えることが可能だろう。まず冒頭は、擦過音や息の音、そして途切れ途切れに鳴らされる楽器音ではじまり、やがて少しずつ細かい同音連打や、さらには上下行する走句が支配的になってゆく。その活発な動きは、なにやら生命力を取り戻したかのようにも聴こえるのだが、おそらくは死に瀕した痙攣なのだろう。

第2の部分は、「無音」を基調にして、単発的に音が生起し、絶えてゆく過程。作曲者によれば、ここではオーストリア民謡「かわいいアウグスチン」が引用されているという (ただしほとんど原型をとどめていない)。ソーラソファミードド、レーソソ、ミードド、という誰もが知るかわいいメロディながら、この民謡は17世紀末、ウィーンで流行したペストによって多くの犠牲者が出たことを嘆く不吉な音楽であり、妻の裏切りに絶望したアルノルト・シェーンベルク (1874~1951) が、『弦楽四重奏曲第2番』第2楽章で引用したことで知られる。ディエ

ス・イレの旋律と同じく、これは虚しい死の象徴に他ならない。

そして第3の部分では、死後硬直がはじまっているのか、断末魔の悪夢なのか、ふたたび音楽は同音連打の連鎖を取り戻し、重層的に打楽器の音響を重ねながら、むしろダイナミックな様相を呈する。しかし——当然ながら——最後には急速に力を失い、虚しい静寂へと沈んでゆく。

Fl (Picc) / A-Fl (Picc) / 2 Cl (Bs-Cl) / Bs-Cl - 2 Trp - 3 Perc (I=Xylorimba or Marimbaphone combined with Xyl / Antique Cym / 4 Wood Blocks / 5 Temple Blocks / 2 Tom-Toms / High Metal Block / Wooden Rim II=4 Pedal Drums / 2 Bongo Drums / Antique Cym / 4 Wood Blocks / 5 Temple Blocks / Medium-Range Metal Block / Wooden Rim III=Xylorimba or Marimbaphone combined with Xyl / Antique Cym / 4 Wood Blocks / 5 Temple Blocks / 2 Side Drums / Low Metal Block / Wooden Rim) - 3 Bell Keyboards (or 1 Bell Keyboard) - 2 Va / 2 Vc / DB

初演 1984年11月12日 ロン・ポワン劇場 (パリ)
ペーテル・エトヴェシュ (指揮)、アンサンブル・アンテルコンタンポラン
委嘱 アンサンブル・アンテルコンタンポラン

●マーク・アンドレ (1964~)

『裂け目 [リス] 1』

アンサンブルのための (2015~17/19)

極度の抑制の中における、わずかな音色の変化。フランス人作曲家マーク・アンドレ (1964~) の音楽の特徴を一言でいえばそんなあたりになるだろうか。

アンドレのこうした特異な様式は、パリでジェラルド・グリゼイに学び、さらにドイツでヘルムート・ラッヘンマンに学ぶという経歴の中で培われたものと考えられよう。やや紋切型の表現になってしまうことを承知でいえば、グリゼイ譲りの倍音処理が、ラッヘンマン的な噪音と静寂の中で明滅するのが彼の音楽なのだ。また、一般に「アルス・スプティリオル」と呼ばれる、中世末期に極度に入り組んだ対位法を駆使した一群の作曲家たちを対象にして博士論文を書いていることも、そのきわめて精緻なスコアのひとつの源流になっているのかもしれない (ルネサンス音楽研究でウィーン大学の博士号を取得した、アントン・ヴェーベルンが思い起こされよう)。

『裂け目 [リス] 1』は、ピンチャーとアンサンブル・アンテルコンタンポランのために2015年から17年にかけて作曲され、2019年に改訂された作品。初演は2017年3月30日にパリで行われている。

スコア冒頭には旧約聖書「創世記」第2章の第2～3節、すなわち「第七の日に、神は御自分の仕事を完成され、第七の日に、神は御自分の仕事を離れ、安息なされた。この日に神はすべての創造の仕事を離れ、安息なされたので、第七の日を神は祝福し、聖別された(新共同訳)」が引用されている。すなわち、ここで描かれているのは、天地がようやく完全に姿をあらわした、その原初的な風景ということになる。

およそ15分を要する楽曲の冒頭では、まず耳鳴りのような弱音がかすかに響きだす。聴こえるか聴こえないかのぎりぎりの振動。そこに少しずつ、管楽器のかすれた倍音が混入し、やがてさざ波のような上下行を繰り返しながら、薄い音の層を重ねてゆく。管楽器のキーをカタカタ鳴らす噪音や、断ち切るような金属音が時折噴出して、悲鳴のような音を立てる様態は、表面上は平穏な海の底で、激しい海流が動いているといった風でもある。

そして終盤。ついには規則的に打たれる切断音が緩やかなコーダを形成する。この部分、実にささやかなリズム運動なのだが、ずっと最弱音で時間が停滞したままだただけに、意外なほどダイナミックに感じられる。マーク・アンドレの音楽を聴く醍醐味はこんなところにも潜んでいる。

Bs-FI / Ob / Cl / Fg (C-Fg) - Hrn / Trp / Trb - 2 Perc (I=Bass Drum / Uchiwa-Daiko / Timp / Vib / Tam-Tam / Waterphone / Bell Plate / Cym / 2 Tri / Schwirrbogen / Aluminium Foil / Styrofoam Pieces II=Bass Drum / Timp / Thundermaschine / Uchiwa-Daiko / Crotales / Tam-Tam / Bell Plate / Waterphone / 2 Tri / Styrofoam Pieces / Schwirrbogen) - Hrp - Pf - Vn / Va / Vc / DB

初演 2017年3月30日 シテ・ド・ラ・ミュージック(パリ)

マティアス・ピンチャー(指揮)、アンサンブル・アンテルコンタンポラン

委嘱 アンサンブル・アンテルコンタンポラン(協賛 エルンスト・フォン・ジームス音楽財団)

●ピエール・ブーレーズ(1925~2016)

『メモリアル(…爆発的・固定的…オリジナル)』

ソロ・フルートと8つの楽器のための(1985)

究極の美とは、いったいどんなものだろうか。

シュルレアリスム詩人のアンドレ・ブルトンが、それを「痙攣的な美」と呼び、「エロティックでありながら覆われており、爆発的-固定的であり、魔術的-状況的である」と説明する(海老坂武訳『狂気(愛)』より)。す

なわち、二つのまるで相反する要素が同居することによって、特別な美の瞬間が立ちあらわれるというわけだ。

1972年、ピエール・ブーレーズ(1925~2016)がIRCAM所長に就任する直前に作曲した『…爆発的・固定的…』(1972)は、ブルトンの著書の一節をタイトルに冠した作品。つまりは爆発的な運動を引き起こすエネルギーが解放される刹那にあらわれる痙攣するような美を、音楽的に模索したものといえようか。さらに作曲者によれば、ここには1971年に亡くなった、イーゴリ・ストラヴィンスキーへの追悼の想いも込められているという。

その後、1985年になって、ブーレーズは『…爆発的・固定的…』の一部を切り取り、不確定性やエレクトロニクス部分も削除して、あらたに「メモリアル」という名で世に送り出した。独奏フルート1、ホルン2、そして弦楽器6名という小さな編成の中に、ブーレーズという作曲家の特質がみっちり詰まった音楽である(ちなみに、彼は93年には編成を拡大した新版も作成している)。

曲は7音の音列(ミb-ソ-レ-ラb-シb-ラ-ミ)を基礎にしているが、作曲者によれば、元タイトル通り、曲中では各楽器の音域をある程度「固定」し、それらの相乗効果が「爆発」を産み出す設計がなされているという(実際、各楽器の音域はほぼ2オクターヴ以内に収まっている)。また、なにより特徴的なのは、おびただしい反復要素である。初期ブーレーズの音楽様式とは異なり、この作品では、トレモロという小さな反復が「音型反復の一部」へと成長し、さらには「音型自体の反復」に発展してゆく様子をはっきりと見て取れる。結果として聴き手は、およそ5分間、117小節間にわたって、無窮動の「痙攣的な美」が炸裂する様子を観察することになるだろう。

ちなみに「メモリアル(追悼)」というタイトルは、28歳の若さで急逝したアンサンブル・アンテルコンタンポランのフルーティスト、ローレンス・ボールガール(1956~85)を偲んでのこと(スコアの最後には彼の思い出に、という一文が記されている)。つまり、ストラヴィンスキーとボールガールという二重の追悼がこの小品には重ねられているわけだ。初演は1985年11月29日、ブーレーズ指揮、アンサンブル・アンテルコンタン

ポランによって行われている。

Fl Solo - 2 Hrn - 3 Vn / 2 Va / Vc

初演 1985年11月29日 アマンティエ劇場(フランス、ナンテール)
ピエール・ブーレーズ(指揮)、ソフィー・シェリエ(フルート)
アンサンブル・アンテルコンタンポラン

●ジェルジュ・リゲティ (1923~2006)

ピアノ協奏曲 (1985~88)

シンハ・アロムという、ちょっとばかり変わり者の音楽学者がいる。彼はパリ国立高等音楽院でホルンを学んだあと、30年間にわたってアフリカ音楽の研究に従事し、その驚異的に複雑なポリフォニーとポリリズムの構造を著書『中央アフリカの器楽ポリフォニー』の中で明らかにした。実は、この本の英語版の序文を担当しているのが、ジェルジュ・リゲティ (1923~2006) である。

1982年、アロムが録音したアフリカ音楽に初めて接したリゲティは、その精緻な構造の美しさにすっかり魅入られてしまう。80年代初頭から既に、彼はコンロン・ナンカロウによる自動ピアノ作品の持つ入り組んだポリリズムに惹かれていたわけだが、中央アフリカの音楽はそのリズムを「人力」で成し遂げていたのだった。

かくして1985年に作曲がはじめられ、翌年には最初の3楽章がグラーツで初演された『ピアノ協奏曲』には、アフリカ音楽から彼が学んだ様々な要素がそのまま刻み込まれている。曲はその後、現行の5楽章版の形に発展し、1988年2月29日にウィーンで初演された。

まず目を引くのは、その小ぶりの楽器編成だろう。一本ずつの管楽器、弦楽5部、そして種々の打楽器という陣容。これはピアノとのバランスを取るためでもあるが、一方では演奏機会を増やすためでもあるという(実際、だからEICの規模で演奏が可能なのわけだ)。曲中では、複雑なポリリズムに加えて、ホルンやトロンボーン其自然倍音がピアノの平均律と衝突し、ほとんど魔術的な音響空間が現出する。

第1楽章は独奏ピアノの右手が調号ナシ、左手が#5つでポリトナー

ル(多調)を形成するが、さらには異なる拍子で記譜された管弦楽とピアノが、最大で3層の音楽的時間を形成する。**第2楽章**は、緩徐楽章。フルートからはじまる奇妙なカノンだが、後半では何度か爆発が起こる。**第3楽章**は、トレモロ風の無窮動音型が、様々な楽器と様々なアクセントで絡み合う過程。**第4楽章**は、作曲者によれば、部分と全体が自己相似をなすフラクタル構造の考え方を応用した音楽であるという。そして最後の**第5楽章**は、それまでの手法の集大成。3つの拍子、そして自然倍音と平均律が層を成し、圧倒的な渦が聴き手を包み込む。

Pf Solo - Fl (Picc) / Ob / Cl (A-Clarinet) / Fg - Hrn / Trp / T-Trb - Perc (Tri / Crotales / 2 Suspended Cym / 4 Wood Blocks / 5 Temple Blocks / Tamb / Snare Drum / 3 Bongos / 4 Tom-Toms / Bass Drum / Guiro / Cast / Whip / Siren Whistle / Signal Whistle / Slide Whistle / Flexatone / Chromatic Harmonica / Glock / Xyl) - Strings (8-6-6-4-3)

初演 (第1~第3楽章) 1986年10月23日 「シュタイヤーの秋」1986(オーストリア、グラーツ)
マリオ・ディ・ボナベンチュラ(指揮)
アンソニー・ディ・ボナベンチュラ(ピアノ)
ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団メンバー
(第4楽章と第5楽章) 1988年2月29日 コンツェルトハウス(ウィーン)
マリオ・ディ・ボナベンチュラ(指揮)
アンソニー・ディ・ボナベンチュラ(ピアノ)
ウィーン放送交響楽団

●マティアス・ピンチャー (1971~)

『初めに [ベレシート]』

大アンサンブルのための (2013)

ドイツの現代音楽界における人気作曲家を世代別に挙げてみると、20年代生まれのカールハインツ・シュトックハウゼン、30年代生まれのラッヘンマン、40年代生まれのブライアン・ファーニホウ(イギリス人)、50年代生まれのヴォルフガング・リーム、60年代生まれのアンドレ(フランス人)といった大雑把な流れが頭に浮かぶ。おそらくこの後を継いで、70年代生まれを代表することになるのが、マティアス・ピンチャー(1971~)ではなかろうか。実際、彼の音楽は、先に挙げた作曲家の様式を吸収し、統合した地点になりたっている。

『初めに [ベレシート]』は、アンサンブル・アンテルコンタンポランとセントポール室内管弦楽団の共同委嘱による作品で、2013年5月24日

に後者によって初演された。

タイトルの「ベレシート」とは、ユダヤ教の聖典であるモーゼ五書(トラー)のひとつ『創世記』冒頭に記された言葉「初めに」を指している。すなわち、本日前半に演奏されたマーク・アンドレ作品と同じように、ここで描かれているのは、世界の原初的な風景といってよいだろう。演奏時間はおよそ35分。90頁ほどの緻密なスコアからなる大作だ。

曲はまさに、一切が存在しない闇の状態に始まり、やがて、どこかで何かの蠢きだす気配が濃厚になってゆく。響き自体はひどく晦渋なのだが、しかし天地創造の過程と考えれば、むしろ描写的な音楽といってもよいのかもしれない。

前半では、コントラバス・クラリネットやコントラファゴット、そしてハープの低音などが独特の噪音空間を形成し、やがて全楽器が徐々に稼働すると、打楽器の多彩な音色を伴って四方へと音響空間を拡げてゆく。

ほぼ停滞した時間の中で、特殊奏法を駆使した抑制的なサウンドが続くという点では、同じ主題を扱ったアンドレ作品と共通点を持っているが、それでも静謐の中に奇妙な明るさと色彩が漂っているのは、豊富なソロ・パートゆえだろう。ミュートを付けたトランペットが、ヴァイオリンが、あるいは他の楽器が長い独白を次々に交替で奏してゆく様子は、どこかユーモラスな味わいも含んでおり、このあたりに、ピンチャーならではの洒脱なバランス感覚がある。

ちなみに、作曲者自身は、この作品を「大きな河」のようなものだと述べている。とするならば、8月27日にサントリーホールで世界初演される委嘱新作『河 [ネハロート]』にも何らかの点でつながる音楽と考えてよいのかもしれない。

2 Fl (Picc / A-Fl) / Ob / E-Hrn / Cl / Bs-Cl / CB-Cl / Fg / C-Fg - 2 Hrn / 2 Trp / 2 Trb - Hrp - Pf - 3 Perc (I = Vib / Crotales / 2 Plate Bells / Bass Drum / Tam-Tam / Crash Cym / 3 Suspended Cym / Tri / 5 Wood Blocks / 5 Bongos / Sandpaper Blocks II = Mar / 2 Gongs / 3 Bell Plates / Tam-Tam / 3 Suspended Cym / 4 Bongos / Wooden Drum / Guiro / Sandpaper Blocks / Metal Chimes III = Chimes / Crotales / Glock / Bass Drum / Tam-Tam / 5 Temple Blocks / Sandpaper Blocks / Shell Chimes / Spring Coil / Frame Drum) - Strings (3-2-2-1)

初演 2013年5月24日 オードウェイ・センター(アメリカ、セントポール)
マティアス・ピンチャー(指揮)、セントポール室内管弦楽団
委嘱 アンサンブル・アンテルコンタンポラン、セントポール室内管弦楽団

[ぬまの ゆうじ(音楽学)]